

30代女たちの日記

泉 麻人



中公文庫



中公文庫

だい おんな につ き
30代 女たちの日記

定価はカバーに表示してあります。

1996年7月3日印刷

1996年7月18日発行

著者 いずみ あさと
泉 麻人

発行者 嶋中鵬二

発行所 中央公論社 〒104 東京都中央区京橋2-8-7 振替 00120-4-34

TEL 03-3563-1431(販売部) 03-3563-3664(編集部)

©1996 CHUOKORON-SHA,INC. / Asato Izumi

本文・カバー印刷 三晃印刷 用紙 本州製紙 製本 小泉製本

ISBN4-12-202642-3 C1195

Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

30代 女たちの日記

泉 麻 人



中央公論社

30代 女たちの日記 目次

石崎和津子・35歳・主婦 9

後藤泰子・34歳・主婦 25

武藤千賀子・35歳・レンタルビデオ店経営 41

石橋照子・35歳・派遣会社スタッフ 57

川添文枝・31歳・歯科衛生士 73

野崎智子・31歳・補正下着メーカー勤務 91

渋沢素美・37歳・百貨店経理部勤務 109

大村今日子・37歳・マタニティー主婦 125

市村万美子・33歳・外資系証券会社勤務

143

塚本恵・33歳・小学校音楽教師

161

関谷和歌子・32歳・主婦

179

富沢知恵・35歳・呉服店勤務

197

宮林佐和子・32歳・主婦

215

あとがき

233

〈文庫版あとがき〉にかえて

237

解説

岡部まり

241

装幀・挿画 安西水丸

30代 女たちの日記

石崎和津子・35歳・主婦



毎月一度、三十代の僕とほぼ同年代の女性たちにお会いして彼女たちの日常を尋ね、日記スタイルの文章にまとめていこう、という試みである。つまり僕は彼女たちに取り憑いて日々のあれこれをスポークスマンとしてお伝えする「巫女^{いたこ}」のような役割である。

さて第一回目の女性は、千葉県市川に在住されている石崎和津子さん。三十五歳の主婦の方だ。

石崎さんは早稲田大学を卒業後、七年前に結婚。また御主人は同じ早稲田文科の同級生（三十七歳）で、コンピュータ機器会社の総務部に勤務し、二人の間には現在、五歳（女兒）と三歳（男児）のお子さんがいる。

和津子さんは家事の傍ら、通信模擬試験添削講座・通称「赤ペン先生」の大学受験英語コースの答案採点・指導——という仕事を家でしている。週平均十枚か

ら二十枚の答案を採点、添削を加えて、月に約五〜七万くらいの収入がある。

といったプロフィールを踏まえた上で、彼女の十月のとある一週間の日記をお読みください。

※以下、毎回お会いした女性から取材したデータをベースに、プライバシー等を考慮した上で僕が多少の脚色を加えた、限りなくノンフィクションに近い創作日記である。ちなみに、各回登場の女性の方のお名前は、仮名であることを、お断りしておく。

また、この「日記」の年代は、『婦人公論』誌の連載取材が行われた、一九九二年〜九三年、と理解していただきたい。

十月×日 月曜日

里織（長女）を幼稚園に送り出してから、赤ペン先生の見直しをする。今日は納品

の日だ。このところ家事が忙しくて、採点が雑になっている。見直しをしていて、丸つけをし忘れた箇所が何か所か見つかった。こんど担当になった村田さんは、几帳面な性格の人で、ちょっとしたペンの汚れや染みにもうるさい。気をつけなくては……。午後、市川大野の母（夫方の）に里織と圭太（長男）を預けて、晴れていたので自転車もとやわたで本八幡まで出ることにする。赤ペン先生の本部のある九段下まではここから都営新宿線一本で行ける。

自転車を千葉銀行の駐輪場に置き捨てる。今日はコワイ見張りのおじさんはいなかった。（ラッキー！）

都営新宿線が東大島の先で地下に潜ると、家を出てきた、という気分になる。いつの間にか眠っていた。焦って席を立つとまだ一つ前の神保町だった。

担当者の村田さんは機嫌が良かった。ヤクルトの優勝（セ・リーグ）がよほどうれしかったのかもしれない。採点・添削した用紙を渡し、今週分の答案用紙二十枚を受け取る。

久しぶりに外に出たので、神保町まで歩いてみることにした。早稲田の時代に何度か来た古本屋を探したが見つからなかった。そのまま小川町まで歩く。スキーショッ

プから流れてくるCMソングがうるさい。

夕方、里織、英会話教室へ。セールスマンが訪ねてきたときに、里織がやりたいと言って、なんとなく始めたものだ。家ではオフロのなかでちょっとした会話のやりとりなんかをしている。里織は案外、語学の道に進むかもしれない。

七時、「クレヨンしんちゃん」を観ながら夕食。里織は最近「アンパンマン」よりもこっちのほうがお気に入り。しんちゃんは、里織と同じ幼稚園の年長組で、その辺に親近感を覚えるのかもしれない。

主人、九時過ぎに帰宅。夕食のクリームシチューを温め直す。胃の調子がすぐれないので晩酌は控える。主人が「プロ野球ニュース」を観ている間、赤ペンを二枚採点した。

十月×日 火曜日

里織を送り出した後、Y耳鼻咽喉科へ。

耳の奥に膿がたまり、先週から通っている。虫歯から蓄膿症になって、それがまた鼻から耳にまわった。耳の穴に管を入れてジュースとなかを洗浄して吸い出す。治り

かけているので痛みはなく、けっこう気持ちいい。

市川の医者はいあまり良くないのだが、ここはまあまあ。ただ二十分、三十分待たされるのが難だ。待合室で前に一度読んだ『女性セブン』をまた読む。松坂慶子と春彦さんの問題はやっぱりダンナが情けないのだと思う。夫の収入が妻より少ない、という所に問題があるのだろうか。赤ペンの仕事もほどほどにしよう。

バスで駅前まで買物に出る。また京成バスの乱暴な運転手にあたる。ダイエーで日用雑貨を買ってから、近所のエービーシーへ。

「酪農牛乳」とMサイズのタマゴを買う。タマゴは奥のほうにもっと日付の新しいのがあったかもしれない。エービーシーは商品は揃っているが、冷房が強過ぎる。涼しくなったのだからもう少し弱められないものだろうか。もう一軒の「F」のほうは寒くはないのだが、店内がごちゃつとしていて陰気。エービーシーに日付の新しいプチダノン（ストロベリー）があったので、まとめて買う。

幼稚園から帰って里織はピアノ教室へ。その間、赤ペンにかかる。採点の途中で、好物の芋かりんとうが無性に食べたくなって、ひと休みしてCDラジカセでチャゲ&飛鳥の「TREE」を聴きながら、ポリポリと一袋あける。

チャゲアスは「101回目のプロポーズ」を再放送で観ているうちに、好きになった。このお正月に主人からお年玉五千円をもらって、駅前のヤンデーで買った。レコードを買うなんて、本当に久しぶりのこと。たぶん大学生の頃のサザン（オールスターズ）以来ではないだろうか。

窓が閉まっているか確認して、ボリュームをおさえてチャゲアスを聴く。隣りの高校生の部屋から同じチャゲアスの「SAY YES」が流れてきて、恥しい思いをしたことがあるのだ。

十月×日 水曜日

昨夜、夫の帰りを待ちながら一時近くまで採点をしたので、朝寝ぼうしてしまった。「ポンキッキ」の音を聴きながらお弁当を作り、里織を送り出したときにはもう「おはよう！ ナイスデイ」が始まっていた（遅刻はまぬがれた）。

ナイスデイの話題は、松坂慶子から飯星景子の統一教会になって、いまはまた松田聖子のキス事件。聖子はあることをしていて、よく娘を名門私立小学校に入れられたものだ。司会のカワバタという男のアナウンサーは、ちょっといい感じ。高校時代